

# 日本語教育における音声指導

## Speech Sound in Teaching Foreign Languages

(2004年3月31日受理)

浦上典江

Fumie Uragami

Key words : 音声, 言語教育, 発音, コミュニケーション, 多言語・多文化

言葉はおしゃべりに始まりおしゃべりに終わる。すなわち、言語から音声は切り離せないにもかかわらず、或いは余りにも密着し過ぎているためか、言語教育において音声指導は軽く扱われている。僅かながらも発音は問題にされるが、それ以前の音声は殆ど問題にされない。「言葉で嘘をつくことはできても、表情で嘘をつくことはできない。」と言う言葉はあるが、表情以上に音声は心を表すと言える。例えば、非英語話者が英語で相手の心が分かる、又は非日本語話者が日本語で相手の心が分かる為に最も重要なことと言えば、音声と文化理解であろう。本稿では、日本における音声軽視の事情、ならびに音声指導の重要性と効果的な指導法を探る。又、異文化コミュニケーションを外国語教育の基本に据えるなら、表情の無い音声による発信は、情の無い心と同じで、良いコミュニケーションの構築には結び付かないという事を述べる。

### はじめに

音声はいわば水か空気のような存在であると言われる。水も空気もなければ生きてはいけないうにもかかわらず、普段はその存在をほとんど意識しない。同様に、普段の会話は、gesture や wink 等言語外言語と言われるもの以外はすべて音声が無ければ成り立たないにもかかわらず、音声についてはほとんど意識しない。

日本人が外国語を日本人に指導する場合と、日本人が母語である日本語を外国人に指導する場合とは、それぞれの困難がある。しかし、共通している問題点は、両者の指導に効果的な方法がないというよりも、読解ならびに聴解の指導において、日本人の指導者は文法や語彙に重点を置き過ぎている。また「コミュニケーションのための言語教育」と言いながら、4技能重視で、中心となる音声指導はほとんどない。その事情については後程述べるが、はっきりしているのは、コミュニケーションのための外国語教育は音声重視でなければならないという

ことである。言語は常に人間の音声であり、文字は音声言語を記録する補助手段に過ぎないという事実を再認識する必要がある。又、文法に詳しい学習者が自然な外国語を身につけるよりも音声にこだわる学習者が自然な外国語を身につける方が速度としては優るという事が外国語学習者を長年に亘って教えてきての実感である。

母親の胎内にいるときから慣れ親しんだ音はかえって説明しにくい。しかし、その音声こそが言語そのものであり、自然な発話に結びつくのは当然である。外国語学習開始の年齢による差は大したことではない。言語指導者も学習者もこの事をまず認識すべきである。

### 音声軽視の事情

日本における音声軽視の事情はいろいろ考えられるが、次の4点を主な理由として挙げたい。

### 1 日本語の発音はやさしいという思い込み

おそらく日本語の音声を授業で勉強したことがあるという日本人はいないのではないか。それに反して、例えばフランスの学校教育における音声指導は徹底している。また4種類の声調を持つ中国語や5種類の声調を持つタイ語などで音声を大切にすることは言うまでもないことであり、多言語多文化の諸国においては、やはり音声の重要性は意味や文法に優るのである。即ち、日本人が音声にそれほど気を使わないのは小松英雄が言うように<sup>1)</sup>他の言語に比較してそれ程複雑でないために「世界の言語の中で日本語の発音が一番簡単だ」と危険な思いこみをしてしまうためでもあろう。井上史雄は日本語の音声の経済性をあげる。「発音の区別を習得する基本的な要素は、その細分化である。つまり幼児が同じ順序で発音の区別を細かくしていったときに、どの段階で発音の習得は大体終わったと見るかが言語によって違うことになる。」と言う。<sup>2)</sup>日本語の場合、5つの母音音素の区別ができた段階で発音が習得できたといえるが、フランス語だと、鼻に息を抜く母音も含めると、母音を10数個も区別するまで習得できたとは言えない。英語では11個の母音と3個の2重母音の習得をもって良しとする。タイ語では短母音が9個、長母音が9個、2重母音が3個、合わせて21個の母音を習得する必要がある。また、日本語の子音は12個の音素の区別ができた時点では発音上の問題はなくなるが、母音と同じく、他の言語では日本語よりかなり多い子音の区別ができなければならない。例えば極端な例ではあるが、アフリカ南部のブッシュマンが話すクン語には子音が100個あると言う。<sup>3)</sup>

日本の小学校教員は1年時に幼児発音をなくすことができればそれ以上の指導はしない。母語の中に、他の言語の発音に近いものをもたなければその発音は難しくなる訳だが、日本人にとってたいした苦勞をせずに日本語が習得できれば、外国語の発音の習得に関して、または外国人の日本語の発音に関して寛容というか無関心になる。それは安易な外来語容認とも関係している。

S.P.Corderは、外国語学習者の言語はinterlanguageであると言う。それがtarget languageと完全に一致することは、target language社会での学習、年齢、環境を十分考慮しても難しい。片山嘉雄は「英語教師の、そして英語教師のための英語学的研究の対象は第一にはこ

のinterlanguageではなかろうか。そして、英語教育の音声指導も伝達の具としてのinerlanguageの教育という見地から考えられるべきである。このような目的論・言語観が確立されるならば音声面からの英語教育の大半は既に為されたのも同然である。」と、昭和55年発行の「あしたの英語教育—80年代への展望—」の中で述べ、英語教育に関わる教師に英語の音声についてさらに深く理解する必要性を説いている。<sup>4)</sup>しかし、25年近く経ってもいまだに音声教育が軽視されているのは残念である。

### 2 音韻組織が単純である

日本語の音節はキャ行などの拗音を含めても111個であるが、英語はTrinka (1966)によれば3203種、楳垣(1976)によれば3860種、個数で言えば、3万個以上もあると言う。比較的少ないと言われている中国の北京語でも魚返善雄氏によれば411個である。<sup>5)</sup>数が少ない理由は色々あるが、結局1で挙げた音素数の少なさと、音節を作る音素の組み合わせ方の単純さであろう。これを外国語学習の基準にさえしてしまいがちなために、音声に対する関心が希薄になり、無頓着にもなるのである。

日本語の音節の少なさは、日本語のモーラ言語としての特徴と一致する。例えば、このモーラ言語としての特徴を英語の発音に用いると、blackやspringなどの1音節語が各々「スプリング(5モーラ)」、「ブラック(4モーラ)」となる。Bloch (1950)が日本語の発音について、「もっとも、際立つ一般的な特徴は、スタカート的なリズムである。」と言っているが、筆者の知る外国人は不思議なことに、国籍を問わず誰もが、「日本語はダグダグダグという感じ」と異口同音に言う。また、日本人が気にしない異音(音素に対する音環境の様なもの)に興味を持つ。一般的に日本人は特別な事情が起きない限り言葉の響きに対する音感について訓練の必要を感じないが、それはここにも原因があり、それが音声軽視の理由の一つかもしれない。

### 3 文字の多さ

日本語の文字の種類の様多さは、世界の言語の中でも格別である。かたかな、ひらがな、漢字、ローマ字のほかにも、国字、造字、当て字、絵文字がある。しかも、漢字も訓読み系列と音読み系列を日常的に使い分けてい

る。この文字使用の多様さのお陰で日本には文盲がいないか、極めて少ないと言える。実際、アメリカでは移民も多く、文字を読めない、読もうとしない人々が多かったのが、e-mailや携帯電話のメールで絵文字などを使用することによって、活字への親近感が起こり、文盲が減ってきたという。

日本では、文字のこの多用が文字への注意の比重の偏りをおこし、音声軽視の理由の一つになっているのではないだろうか。

イエスベルセンやブルームフィールドが「文字は言語そのものの外にあって、言語の代用品にすぎない。」と言う様に、言葉は本質的、第一義的に音声言語であると言える。一般論では文字言語は音声言語の具象化であるとも言う。音声言語には文字に現れない多くの情報を伝達する機能がある。「音声自体が文法項目をもっている」と、水谷<sup>6)</sup>や榎本<sup>7)</sup>は言う。反対に多くの情報を文字から受ける日本語では音声の必要性が少ないと言える。

もともとは漢字、ひらがな、かたかなの使用目的は決まっていたが、最近はそのすらもかなり自由自在に操られるようになって、更に文字の情報伝達機能が発展した。言語を構成する諸要素の中で、他の言語からの影響をもっとも受けにくい、すなわち変化しにくいのは、音声構造ではないだろうか。文法もよく影響を受けて変わるし、語彙は最も変化しやすい。音声も最も変化しにくいということは日本語にとって、どういうことなのであろうか。第一項で述べてきたように、音声の組織が極めて貧弱なために、しかもそれが変わらないために、どうしても漢字やその他の文字の活用が重要になってくるのである。すると、それで補われるものだから、音声にますます無関心になってくるという、音声にとっては悪循環が繰り返されるわけである。

鈴木孝夫は「日本語と外国語」において、次のように述べている。<sup>8)</sup>

「さて文字とは、紙の上に書かれた1種の図形である上、目という高度の情報処理能力を備えた感覚器官に訴える視覚情報である。

ところが表音文字は、たとえそれが理想的に機能した場合ですら、原理上、音声で弁別できる情報以上のものを表すことがない。それだから表音文字と称され

るわけだ。

つまり表音文字で書かれた言語を読むという作業は、耳で聞いても区別できる範囲の情報を、視覚情報の形に転位変換して読んでいることなのであり、言い換えれば、音を読んでいるわけである。中略

ただし、音の組み合わせだけで効率の良い伝達を行える、恵まれた音声のしくみを持っている言語の場合ならば、すでに音声だけで伝達効率は充分なのだからそれを超えることのない、またそれ以外のものを付加することもない表音文字を使っても、別に損だとか、もったいないなどというわけではないのである。

しかし日本語は、さきに述べたように音声の面と意味構造の面で二重の制約を持つ、ある意味では宿命的に恵まれぬ性格を持った言語なのである。だからこそ文字を使う場面で、もし音声の弁別能力を超えないような表音文字だけを使えば、言語全体としての伝達効率は甚だしく低いレベルに抑えられてしまう。」

そこに、日本人の、そして日本語の特質があって、結局音声に対する無関心が宿命付けられてしまっているのかもしれない。

### 3 聴覚型(耳型)より視覚型(目型)が多い。

日本人には5・7・5調の様な独特のリズム感とオノマトペの様な音象徴とも言える音感覚があるが、それらは音声の感覚とは言い難い。「音声」と「音」は違うからである。ノックの音や足音や電話のベルは音声ではない。たとえば人に近づいていることを示すためにわざと足音を高くすると、それを言語外の言語であるとは言っても音声とは言わない。音声とは人が自分の感情とか意志などを伝達するために音声器官を働かせて出す音だからである。したがって、周囲がうるさいときに、静かにして欲しいという気持ちを「シー」と音に出したり、咳払いをしたりして伝えるのは音声と言える。

日本語はもともとは動詞言語であると言われている。そして、語彙を構成する音節をもって、じつに生き生きとしかも容易に、5・7・5または5・7・5・7・7のリズムが生活に染み込んでいた。(能のリズムは2拍、4拍、6拍、8拍があり、日本独自の物でないことが分かる。)しかし、これはリズムであり、音声ではないので

本稿では扱わない。

オノマトペは、基本的には音声によって、音や声や状態を表すのであるから、象徴音あるいは象徴言語と言える。擬音語、擬態語、擬声語、擬情語を総称してオノマトペと呼ぶ。日本語を外国人に教えていちばん苦労するのは外来語とオノマトペである。日本人はオノマトペを使うとき、特別なアクセントを用いたり、音声に特に気を使うこともない。大体2, 3モーラの音を2回単調に繰り返す事が多く、音だけで微妙な語感を出す。オノマトペはフランス語の *onoma-topoeie* から借用した外来語でギリシャ語の *onomatopoiia* から来ている。ギリシャ語の意味は「命名する」と言う意味で、英語の *onoma-topeia* もここから来ているが、日本語の中にはヨーロッパ諸言語とは比較にならない程オノマトペが豊富に含まれているという。日本語、日本文化とよほど性に合っているということか。<sup>9)</sup>

英語の音がそのまま単語になったようないわゆる音象徴と比べてみると、日本語のオノマトペは、音でありながら、音でない、どちらかという視覚的な色合いを持っていることがわかる。

- scream (きゃあきゃあ悲鳴をあげる, ぎゃあぎゃあ泣く)  
 glitter (びかびか光る, きらきら輝く)  
 glare (ギラギラ光る)  
 cough (こんこん咳をする)  
 roll (ころころ転がる, ぐるぐる転がる)  
 cackle (けらけら笑う)  
 guttaw (げらげら笑う)

中津療子は英語に上達するには「発音以前の声を問題とするべきである」とかねてより、かなり強く主張してきている一人であり、「言葉の『響き』に対する音感について日本人はあまり訓練されていない」と言う。<sup>10)</sup>

これは日本人が日本語で話している場面を見ると良くわかる。イギリス人やアメリカ人とはかなり違うことが多い。はっきり発表するべきときに、手で口を覆ってぼそぼそ話す者、逆に、小さな集会でも喉の奥から絞り出すような大声で演説するもの、エレベーターなど狭い公共の場で、外まで聞こえるほどの大声で話す者、甲高い声でキーキーまくしたてる深夜放送のディスクジョッキー。どれも聞いていると「頭が痛くなる」と言う人は少数で、

あまり気にしないようである。

NHK教育テレビの「百語英会話」の外国人講師は、日本語と英語を交ぜこぜにしながら番組を進めるのであるが、彼の日本語を聞いていると、頭が痛くなるほどのテンションで話すのだが、英語のときはやや落ち着いた声で聞きやすい。

明るい声、弾んだ声、生き生きした声、澄んだ声、なまめかしい声、きれいな声、美しい声、沈んだ声、ぎすぎすした声、暗い声、刺のある声、怒気を含んだ声、鈴を転がすような声、イライラした声、人をイライラさせる声、甘い声、媚びるような声、へつらうような声など、声の響きには色々あるが、なかなか声作りは大変である。持って生まれた声は簡単には変わらない。最近テレビにも度々出演する女性姿のよく似合う男性タレントが声はあくまでも男性の声であってもその響きがいかに女性的で、「さすが！」と思うことがたまにある。なかなか「声」は変えられないということか。

外山滋比古は努力して声を変えることが出来た人の例として、イギリスの元首相マーガレット・サッチャー女史の例を挙げている。<sup>11)</sup>

「多くの人に語りかける政治家にとって、声がいかに大切であるか、サッチャー女史も政治家として円熟する時期になって、強く感じたのである。」

話す声を美しくすることは、手習いできれいな字を書くようになるのよりもはるかに難しいが、ことばの美しさにより深くかかわっているように思われる。

母親や家族や周囲の者は乳児や幼児に話しかけるとき、とてもやさしい気持ちで話しかける。その声と話し方には特徴がある。すこし高めで、ゆっくりめである。目上や上司と話するときも、やや高めである。年下や同僚に話しかけるときは少し低めになる。また、先生方言というものもあるようである。

昭和58年文化庁発行の「言葉」シリーズ18「言葉と音声」にたいへん面白い座談会があるので、簡単にはしょうりながら紹介したい。<sup>12)</sup>

澤島「最近では音響分析、録音なんかで記録できますけれども、言葉にしる人間の声にしる、音というものをちゃんと意識的にとらえて、それを普遍的な形で認識

するなり、相手に伝えるという姿勢が、少なくとも日本語の話し言葉とか国語教育の中では欠けているのでしょうか。(中略)だからある意味では、学校教育だけの弊害かもしれませんね。結局そういう弊害が現代日本の日常社会に浸透してしまったんじゃないかと思うんです。」

野元「そういうふう意識が低いということがもし悪いことであるならば、それはどういう意味で悪いのでしょうか。」

幸田「(前略)音声は、本来、精神や感情の伝達手段であるわけですし、伝達機能と同時にその働き自体にも美しさがあると思いますが、今それが自覚されていないんじゃないかという気がするんです。」

水谷「発音に対する関心というのは、国によっていろいろのようですね。もちろん個人によっても差があるでしょうが。大ざっぱに言って、欧米の人にくらべてわたしどもの方が音について関心がない。中国人なども、どちらかというと、ないほうだと思うんです。」

結局、文字というのは、内容を別にすると、いつでもどこでも、相手の都合に関係なく、書き放しができる。それに対して、コミュニケーション、特に1対1のコミュニケーションを大切にするところではそれはできないので、いきおい、音声に注意深くなるのであろう。もっとも、インターネットがこれだけ普及すると、どうなるかわからない。ただ、インターネットも音声の時代に入ったので、やはり音声は重要であるし、音声と生き方は切り離せないという事を忘れてはならない。

#### 4 日本語の儉約性

「東京、行く」

「ううん、行かない。」

「じゃ、やめようかな」

このように、日本語では主語をよく省略する。これも日本語から、音声への関心を奪っているひとつの原因と考えられる。音声に気をつかう暇もなければ、必要もない。ハワイの英語もアメリカ本土より主語を省略するが、「それはハワイに日系が多いからさ。」とアメリカ人に言われて、妙に納得してしまったことがある。冗談だったのかどうかは分からない。

又、日本のあいまい文化も、省略の一つの現象であり、多くを語らず、したがって多くの音声を使わず、語り手と聞き手の間にほどよい認識をもたらす。ただしその間の情報にギャップがあれば、当然深刻な問題も発生するのだが、今迄の日本の狭い社会の中ではなんとか暗黙の了承のもとに無事に、かつ平和的な調和が保たれていた。しかしながら、これからは、そうはいかない。

最近はやりの「おれおれ詐欺」など、ちょっと考えれば、何故ひっかかるのだらうと、不思議に思うが、弁護士でさえ引っ掛かったというので話題にもなった。日頃から、家族との会話を大切に、その音声にも注意を払うことの必要性を説いた社説も数社の新聞に掲載された。

悪質な押し売りと言え、昔は玄関に座り込んですごんだものであるが、最近是一般市民に執拗に電話をして勧誘し、「けっこうです。」とか「いいです」を引き出すと言う。もちろん「要りません」という意味で言ったものを、「よろしい」にすり替えてしまうのである。これも、強い調子で、きっぱりと、主語、目的語をはっきりさせて断ることに日本人が慣れていないためである。

### 音声教育の重要性と方法

言語は世界におよそ5000あると言われる。勿論、言語であるから、5000全てに音声はあるが、文字を持つ言語はごく僅かであるという。そして、その文字らしい文字が初めて登場したのは今から4000年位以前のエジプトおよびメソポタミア地方だと言う。「余りに音声に当たり前すぎるから、おろそかにされるのだ」と言うのは、言い訳にしかすぎない。混迷を深める世界情勢だからこそ、グローバル社会だからこそ、美しい音声と、どこでも通じる音声を身につけて行く必要があるのではないか。

大学の音声学のテキスト以外に、一般向けのテキストや参考書は多い。しかし、音声指導についての参考書はなかなかみつからない。音声学と音声指導の違いに関する参考書も少ない。ただしリスニングの参考書には発音のことがしばしば取り上げられる。

たとえば、岩切信正はその著「やっぱりリスニング」において、正しい発音は基本中の基本であり、正しい発音の知識なくして、正しいリスニングはありえないと言う。<sup>13)</sup>

反対に、正しい発音を身につけるには、くり返し、リスニングをすることが必要であると言う音声学者もいるが、少ない。B.Lumsden Milneは、音声面の正しい指導がなくては、総合的な英語力はつかず、そのための指導に音声モデルの反復練習、モデルと学習者の反復の間の差の指摘、学生自身による発音の修正、その繰り返しを強調する。その繰り返しによって、学生は、モデルの音を分析的に聞くことができるようになる。さらに、自分の音声を反省的に聞き取れるようになるという。

たしかに、リスニングの構成要素は複雑である。分析と修正が必要である。さらに、一般常識や知的水準までが問題になる。受け身的な働きではない。分析と総合力を必要とする能動的な働きなのである。しかし、聴覚能力や発音能力の前に、発生の練習を行うことで、その問題は幾分なりとも、解消される。言い換えれば、リスニングと発音習得の間に境はないと言うことで、もっと重要なのはいかにして良い音声を身につけるかということである。

その方法として、斎藤孝<sup>14)</sup>や中津療子のからだを揺さぶる練習方法は非常に効果がある。音声というのはやはり原始的かつ本能的伝達手段であるから、身体的なものとして単純にまず把え、それから現代人にマッチした方法を考える。

外国語の習得だからといって、妙に緊張する必要がないのは当然だし、緊張しては肺に十分な空気が届かないから、良い声を出すこともできない。自然体で体を揺さぶる練習、しかも目をつむって体を左右、前後に揺さぶる。確かに人が見ていない所ではできても、教室の中ではやりにくいかもしれない。ましてや成人の場合は恥ずかしさでかえって緊張してしまう。それなら、方法を教えて誰も見ていない家庭ですることをすすめるべきだけのことである。

また、最近では、國弘正雄など、音読の効果を取り上げる者が多い。<sup>15)</sup>音読は、発声、発音、文法、語彙、その他、言語にかかわるすべてをふくんでいるからである。先に名前を挙げた斎藤孝は音読こそ王道であると言い、英語自己学習法の千田潤一や、英語教育改善に取り組む谷口賢一郎も音読の大切さを強調する。

ここからは具体的に日本語の音声の練習に入る。水谷信子が言うように<sup>16)</sup>、初期における音声指導は極めて重

要である。「外国人だから発音は少しぐらい変でも構わない」という考えは捨てないと、学習者も指導者も後で泣くことになる。その点では文法よりも重要である。

まずは、「あいうえお」の発声練習である。「あえいおう」でもどちらでも問題はない。アナウンサーや劇団の俳優になるわけではない。母音がすんだら当然、子音も行う。音素だけではなく、異音も行う。できるだけ、幅広く、さまざまな音を出す。口をはっきりと明けることも必要である。外国人の日本語習得者で、「まるで、日本人みたい」と周囲を驚かせる者が多いが、彼らは一般の日本人の口元をとことん観察して、ボソボソとした発し方を体得するのである。しかし、これが、先々までも有効であるワケではないということにも気が付いてくる。この発音の方法は、ごく少数の日本的な身内的な社会では通じるが大勢の人への働き掛けや重要なことの伝達には向かないということも体得してくるのである。それで、やはり、それぞれの音素と異音の発声練習を

1. 生の教師の口元をよく観察させる。図を書いても良い。
2. 具体的な顔と体の動作をともなってリズムカルに練習させる。かなりオーバーに練習した方がよい。

次に単語であるが、あまりアクセントのないオノマトペを、場面をイメージしながら、またはイメージさせながら練習する。先にも述べたように、オノマトペと外来語は外国人にとって、その意味を理解する最大の難問である。したがって、オノマトペはイメージの練習には、余り余計な負担をかけずに有効性を出す効率的なこととも言える。そのイメージをからだを揺さぶりながら思い浮かべ、思い浮かべながら練習する。

次は簡単なセンテンス。センテンスと言っても、例えば、「けっこうです」を、やはりいろいろな場面をイメージしながら、さまざまなイントネーションで表現する。ジェスチャーを添えたり、「いいえ」や「もう」を添えてもよい。

音の高さだけではなく、次は強さの位置を変える。さらに、それらを複数にしたり、複合を行う。全て意味が変わってくる。これは、「際だち」「際だたせ」「卓立」「プロミネンス」「文アクセント」などと呼ばれるものである。音の長さ、音色、ハリも変えるとよい。

例えば「す①い②ま③せ④ん⑤」で練習すると、際立たせが①の場合と②の場合とでは、話し手の意識も相手の印象も確実に違う。他にも、「ありがとう」「さようなら」「しつれいします」「わかりました」「けっこうです」「いいえ、ちがいます」「はい、そうです」等で練習する。それらの言葉に「ね、よ、か」等終助詞をつけるとおもしろい。オーバーなジェスチャーをつけて、感情表現がわかると練習が弾み、初級レベルから日本語の心が理解できるようになる。日本語のリズムや母音・子音の無声化も体得できる。意味や文法の説明は質問されない限り行わない。

また、母語別の問題がある。主に英語、韓国語、中国語、タイ語を母語とする学習者の問題点と注意点を整理しておく必要がある。それらの母語の干渉による発音上のまちがいは、個人への注意でなくクラス全体への注意として、集中的に練習する。なおこれについてはNAFLの日本語教師養成通信講座Dに詳しい説明があり、大変参考になる。<sup>17)</sup>

その次は、音読である。

人が今ほど音声にたいして、乱雑というか、無神経になる前は、学校教育でも確かにもっと音読をさせていた。ヨーロッパ諸国等においては、今でも音読は重視されている。しかし、日本のように一斉にとにかく読ませるといのではない。美しい音声を大切にするのは、なにが必要かを考えて見ればすぐわかることである。

音読も、やはり、身体を軽く動かしながら行くと美しい声を出しやすい。そして、全身で音読するのである。教材は次の順序が効果的である。

1, 50音→2, 挨拶→3, 単語→4, 日常会話(単文→複文)→5, 詩・歌→6, 標語→7, speech・essay  
意味は大ざっぱで良い。4, 5, 6などは、音声、音読のイメージから解釈させるのも良い。何より大切なことは、楽しく行うということである。以前は朗読と言う言葉が使われた。音読と言うより朗読と言った方が楽しい。むやみに「大きな声を出して!」とは言わず、美しい音声に注意を向けさせる。

## 結 び

長谷川清は英語教育改革への構想として、自ら音声教

育にこだわった授業を実施して音声教育の重要性を確認した。<sup>18)</sup>筆者も大学での英語音声学やリスニングの指導を通して一般的な日本人学生の音声への無関心さを痛感し、言語教育における音声の重要性と、その調査・研究も行った。<sup>19) 20)</sup>

外国語や日本語をかなり学習してもなかなかネイティブと同じ発音ができるようにはならないし、ネイティブと同じくぺらぺら(?)話せるようになる必要もない。ネイティブと心地よく話せ気持ちが伝わればよい。そこに音声教育の意義がある。

田中望や金田一春彦、ならびに西尾圭子は、日本語教育での能力教育に、早くから、疑問を投げかけ、警鐘を鳴らしていた。筆者もこの点には最大の注意を払う必要があると思う。理由は次の数点である。<sup>21) 22)</sup>

- 1 日本の従来の教育は上から下への発想が多かった。コミュニケーションのための言語教育にそれは無駄である。
- 2 強者、弱者の発想が、無意識にでも働いてしまう。日本とアメリカやヨーロッパなど、日本とアジア諸国の間に、力関係の上下があるかのような錯覚を起こしてしまう。
- 3 特に「弱者への支援、救済」と言う言葉、あるいは、そのような意識の元に「日本語はこうあるべきだ。」という既成概念で、形だけを押しつけ、遂には日本への同化を目標としてしまう。

要するに、日常生活での、発声、音声、発音等に最大限の注意を払って、適正な音声表現を習得し、より良いコミュニケーションを構築するように教師も学習者も努力するべきだということである。

さらに、音声は文法や語彙にくらべて変化しにくく、外国の影響を受けにくいと言うのは、そこに、個人や、国や、地方の個性があるということではないか。そして、それを、それぞれが自分の体を通して、外へ表現することができる。音声は、個性であり、アイデンティティーなのだ。そういう意味で、音声には独創性があっても良いのではないか。もちろん音声には、水谷信子が言うように、音声の文法というものがある。しかし「こうでなければならぬ」という絶対的なものではない。また、

最近はかつてなかった程、主に若者達によって文法や比較的变化し難い等の発音までもが変化させられ、コンビニ表現や半疑問等、新しい待遇表現が生じてきた。それを乱れとしてとるか、変化としてとるかで、言葉のアイデンティティーも異なってくる。人に伝える為に言葉を創り出すのなら、「その言葉は生きている」ということができる。水谷修の言葉を借りて言えば「ことばが自分一人だけのものではなく、社会共有の財産であり、相手に通じなければそれはもはや言葉ではないという観点に立って言うならば、まず自分の言語行動を鏡に映して反省することが何よりも必要なのではなかろうか。<sup>23)</sup>」

外国語日本語を問わず、音声指導を通してきちんとした挨拶など、より良い言語習慣を身につけていくことによって、初めて国際的に通用するコミュニケーションができると言えるのだと思う。

## 参 考 文 献

- 1) 小松英雄：「日本語の世界7」中央公論社（1981）  
pp3～4, 321
- 2) 井上史雄：「日本語は生き残れるか～経済言語学の視点から～」PHP新書（2001）pp117～124
- 3) 町田健：「言語学が好きになる本」研究社（1999）
- 4) 中教出版英語科編集部：「明日の英語教育」中教出版（1980）p23
- 5) 安藤貞雄：「英語の論理・日本語の論理－対照言語学的研究」大修館書店（1986）pp112～118
- 6) 水谷信子：「心を伝える日本語講座」研究社出版（1999）pp112～121
- 7) 榎本正嗣：「日英語 話し言葉の音声学」玉川大学出版部（2000）p3
- 8) 鈴木孝夫：「日本語と外国語」岩波新書101（1990）  
pp166～169
- 9) 田守育啓：「オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ」岩波書店（2002）
- 10) 中津療子：「未来塾って、何？～異文化チャレンジと発音」朝日新聞社（1986）pp72～73
- 11) 外山滋比古：「『ことば』は『こころ』」講談社（1997）  
pp34～35
- 12) 文化庁編集：「言葉」シリーズ「言葉と音声」文化庁（1983）pp6～11
- 13) 岩切良信：「やっぱりリスニング」ベレ出版（2001）  
p31
- 14) 齋藤孝：「からだを揺さぶる英語入門」角川書店（2003）
- 15) 國弘正雄：「國弘流 英語の話しかた」たちばな出版（2000）
- 16) 水谷信子：「日本語教師養成通信講座3-1日本語教授法II(1)」アルク（1987）p27
- 17) 大坪一夫監修：「日本語教師養成通信講座D-1日本語の音声(1)(2)」アルク（1987）
- 18) 長谷川清：「英語教育で何を教えるのか～英語教育～教育変革への視点と構想」高文研（1988）  
pp46～50
- 19) 浦上典江：「コミュニケーションのための英語教育」中国短期大学紀要第31号（1999）pp207～224
- 20) Uragami, Fumie: "Foreign Education for Sustainable Development" Chugokugakuen J. (2003) PP51～56
- 21) 田中望：「日本語教育のかなたに－異領域との対話」アルク（2000）
- 22) 金田一春彦：「日本語セミナー二 日本語のしくみ」筑摩書房（1982）
- 23) 水谷修：「話しことばと日本人」創拓社（1979）  
p.224
- 24) 文化庁編：日本語教育指導参考書「音声と音声教育」文化庁（1971）
- 25) 音声文法研究会編：「文法と音声III」くろしお出版（2001）
- 27) 町田健編：「日本語音声学のしくみ」研究社（2003）
- 28) 松崎寛, 河野俊之：「よくわかる音声」アルク（1998）